



10

15

20

25

30

35

40



楊梅雨延馬

10

15

20

25

30

浪枕 あみ まくら

白の鳥 しろのとり

猶 なほ

武海 ぶかい

上之卷 かみまき

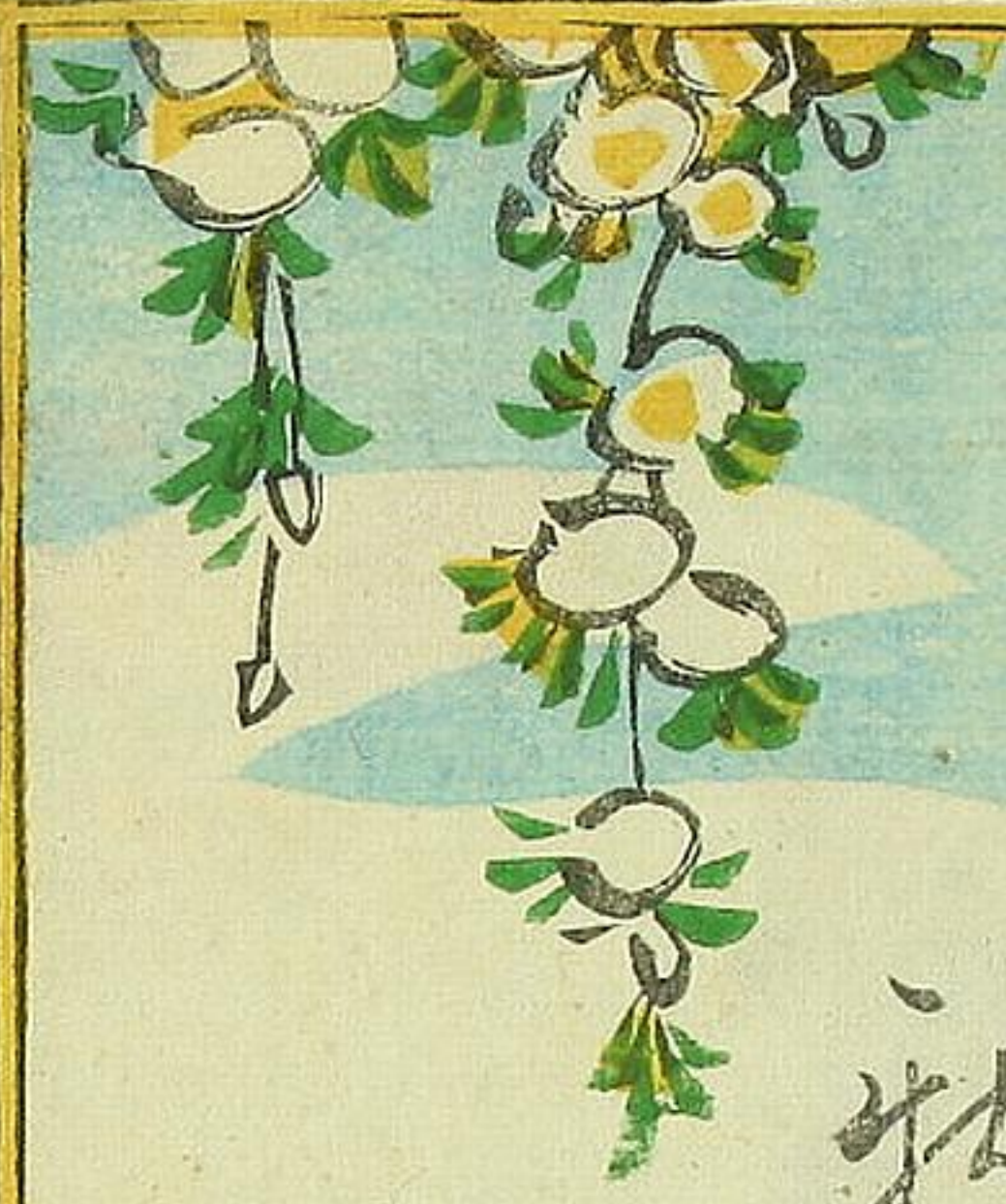
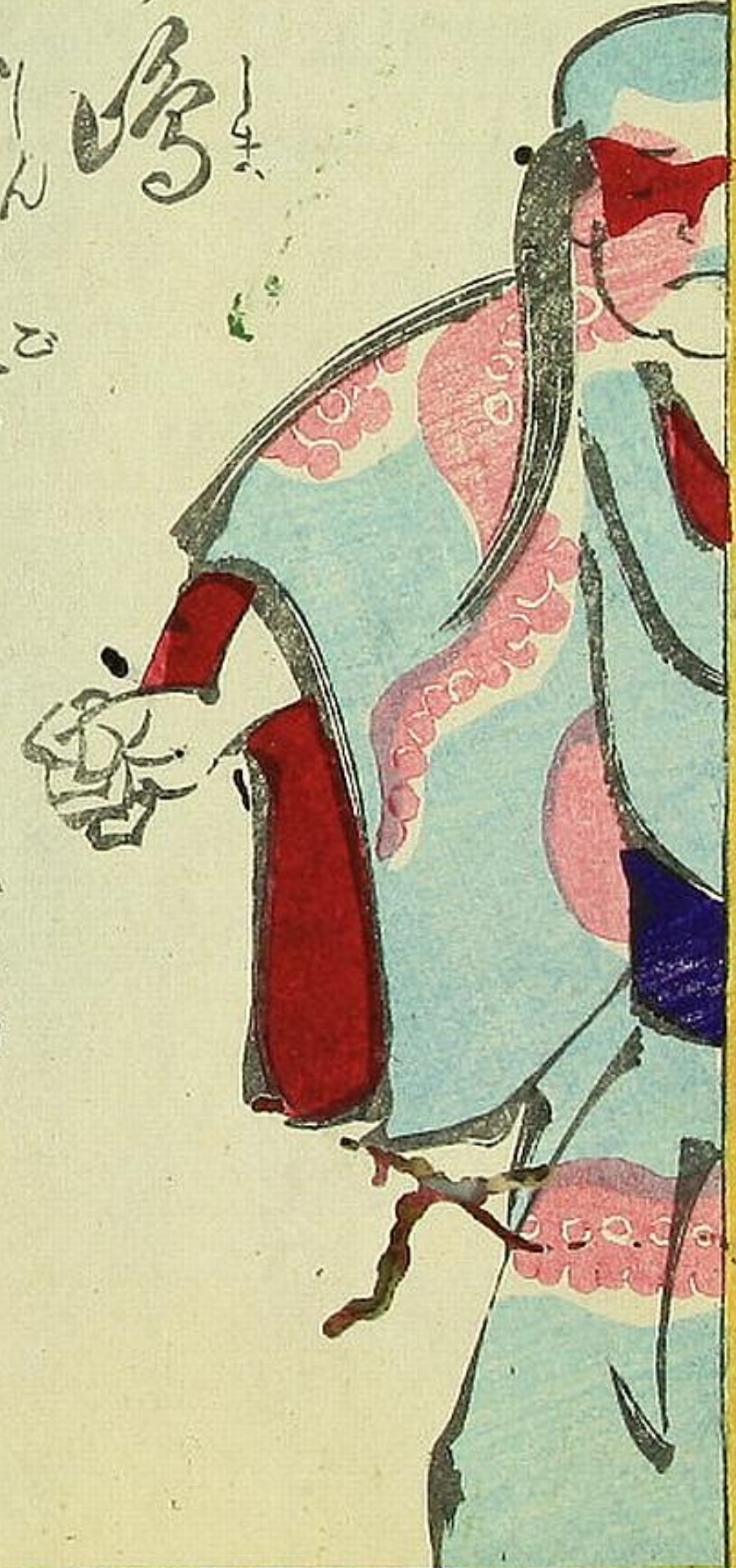
久保田 くぼた

彦化縁 ひこけ縁

揚海 ようかい

周正画 しゅうせいゑ

延壽堂持 えんじゆうどうぢ



五月雨さつきあめは近ちかき窓下まどしたの机つくえも本文ほんぶん歌舞伎新報かぶきしんぱうのその脚色あしなの江えの島新語しましんごと此このせつ硯すずりの干瀉かんげとありし。彼曾我殿原そがのとのらより彷彿ふつぷつとる。貧乏屋敷びんぼうやしきの鬼王おにおうもね。浮世うきよと辛からく禿筆かぶらひのてこころ久保田くぼたが拾ひろふ貝売かいうりその蛤かきがらのうら。昼氣樓ひるきろうも吹ふどろろ。秘伝ひでんの虚うつろと交まじへる。ん。でも三編さんぺん三杯酢さんぱいすも存ぞんらんとする。此一編料理このいちぺんりょうりの素もとより。加減かへん酢すさへ。いと鳥貝とりかいのころもえなく。空蟬うつせみ貝かいのうら。つるまけと。初編はつぺんと讀よんで。モウ澤山さわさん決きして再進さいしんへ致いたさぬと。看客まなび定まめ。小思おぼし。召めき。人ひとが。其篇そのへんと一。番ばんおつと。人ひと。種ねか。求もとめ。を。下くださ。ら。べ。有あり。か。子この。お。仕し。着き。ざ。り。ふ。朝比奈あさひなめうと。希まれふ。の。曾我そがの。主個まなこと。用入もちいの。二役兼にやくけん。貧士族びんしぞく。

久保田ひととら記





山
村
長
太
夫
隱
居
と
常
閑
と
云



鳥
居
清
滿
筆

二
代
目
團
十
郎
の
妻
非
号
翠
扇
と
云

老女宮路



御免 又松の内
 さきさき 場所
 いかにも 柳子
 家の 形 あり
 どのか まち 小 交り 夕 暮り
 鐘の 音 あり 柳子 あり 我
 家 人 あり 柳子 あり 今 鐘 あり
 小 風 あり 柳子 あり 柳子 あり 柳子 あり
 利 業 あり

今 之 こと 柳子 あり あり
 勝り あり 柳子 あり あり
 思ふ 柳子 あり あり あり
 長 清 あり あり あり あり
 打 柳子 あり あり あり あり
 侍 柳子 あり あり あり あり

柳子 あり あり あり あり
 柳子 あり あり あり あり
 柳子 あり あり あり あり
 柳子 あり あり あり あり

おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと



おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと
早く申せぬぢやうと
おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと

おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと
早く申せぬぢやうと
おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと

おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと
早く申せぬぢやうと
おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと

おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと
早く申せぬぢやうと
おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと



おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと
早く申せぬぢやうと
おのれをばかぢやうと
思はれぬぢやうと

親子と人の命の祝

代金を取らぬ人

ふんふんふん

ふん

おはどしと

おはどしと



くみ編み

くみ編み

くみ編み

くみ編み

くみ編み

くみ編み

くみ編み

くみ編み

つき利のこたゑに掛けたる
 とくへらうのきんぎょあらげや
 可憐人おあけの目とゆ
 是れぬとあつこの今
 交けのひ
 化しをモウ
 是れぬとあつこの今
 交けのひ
 化しをモウ

又一人の金も余り
 目と解けぞつこの金也
 小海紙のあられ
 かつとつと箱と
 場所合熱と生の
 赤たると
 けんと
 けんと
 けんと
 けんと

あまろか
 情ほとふ
 ぞゆと
 家の子性た
 奥の金糸糸糸糸
 揚のどくた種か
 まるどふり種か
 とみいふやあつ
 名夜日本志
 一巻の紙の宛
 名夜日本志
 一巻の紙の宛

あまろか
 情ほとふ
 ぞゆと
 家の子性た
 奥の金糸糸糸糸
 揚のどくた種か
 まるどふり種か
 とみいふやあつ
 名夜日本志
 一巻の紙の宛
 名夜日本志
 一巻の紙の宛



くしとすゑあつりなまび
 かたへつてさきへてよ
 打向ひ入りさう何とや
 てゆふはあつていける

つまき
 小指のさへ
 切られ
 金の封
 切迫るらんで
 切迫るらんで
 小指のさへ

又あはれと
 まきよ共く
 幼きほど
 か方と
 とも

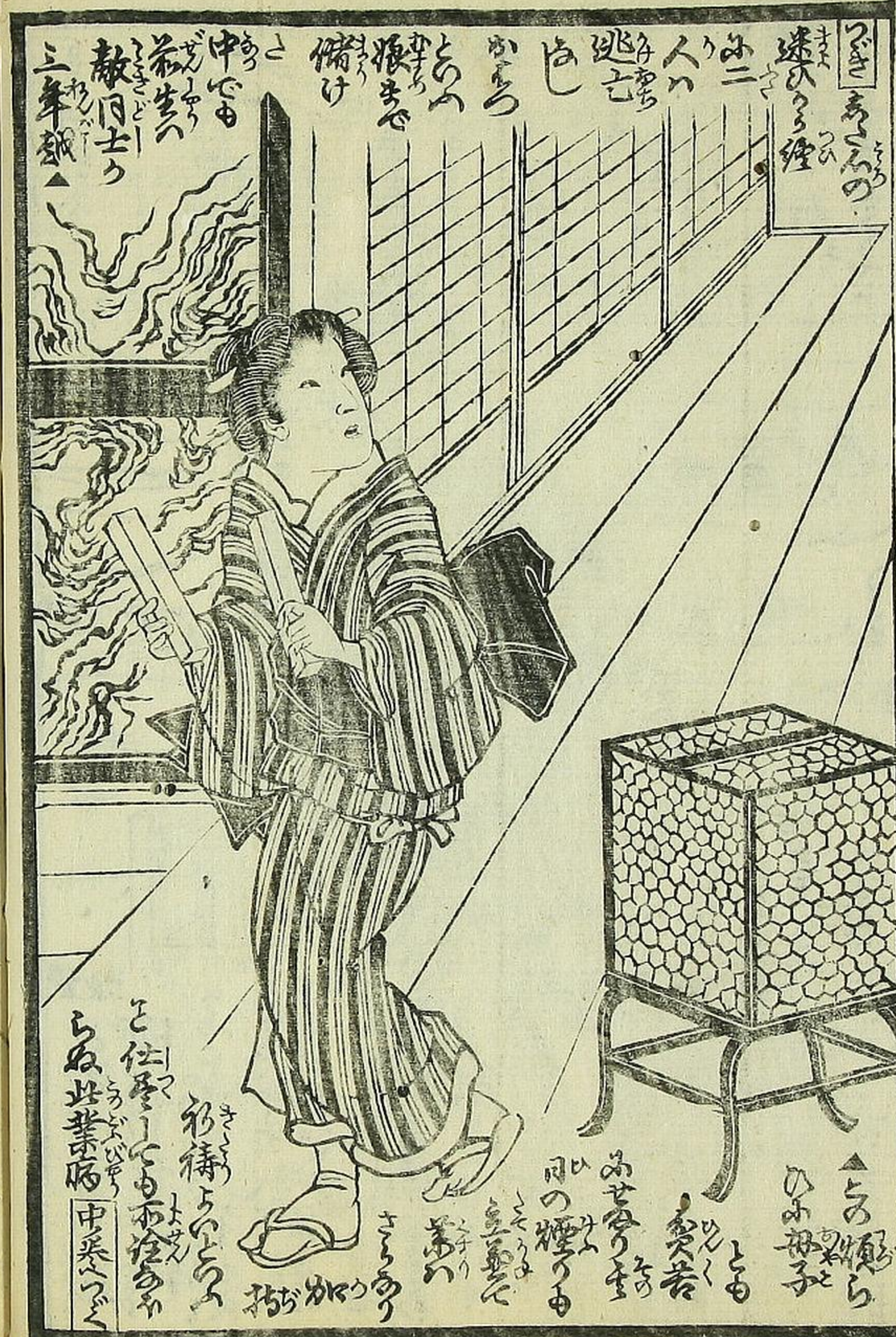
とほろろ
 場
 うま
 そ
 せ



まのうけ
 下馬
 大世
 後よ
 あり
 あり
 あり
 あり



とほろろ
 場
 うま
 そ
 せ
 大世
 後よ
 あり
 あり
 あり
 あり



小倉山 青樹榮 廿日日新 五編 泉竜亭是正作 櫻齋房種画

算法教授書 全

鼠裱甲子真聞 三編 泉竜亭是正作 櫻齋房種画

人民心携交際義務 同

延壽百人一首 全

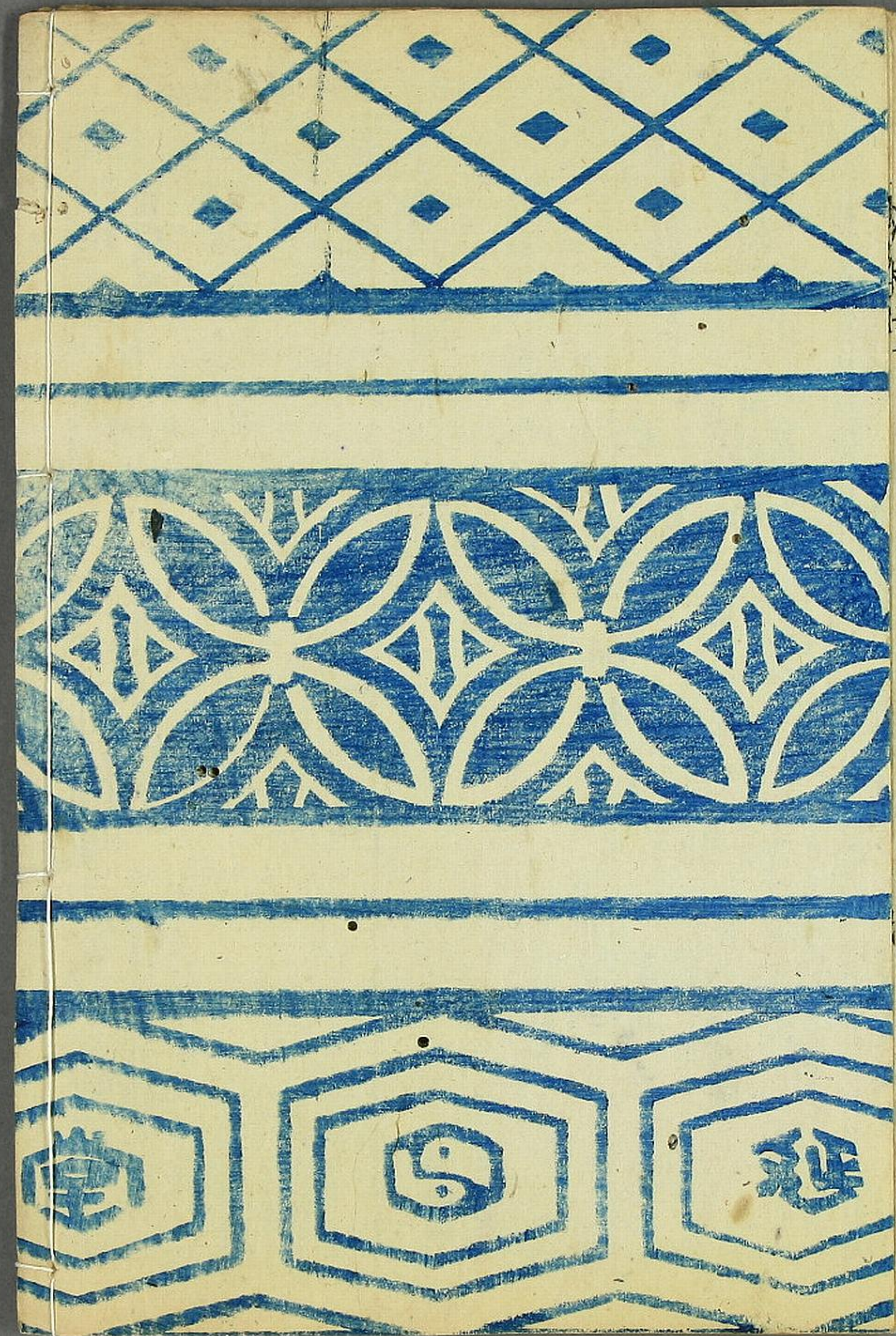
大日本海陸全圖 銅版 全

地本錦繪問屋 東京日本橋通三丁目十三番地 延壽堂 小九屋鉄次郎版元

白縫物譚 豊國 画

皆さるに在るの若菜根物縁 故人種貞稿種彦作 系板菊壽堂主人為今 日新園社にて後編と 出版するに惟のを以て 月氏又乞て極密より一層 甚介引に於て板を看察方 陸續出来とて伏て希ふ 六十四編出版 板元鉄次郎

010190516771





浪枕

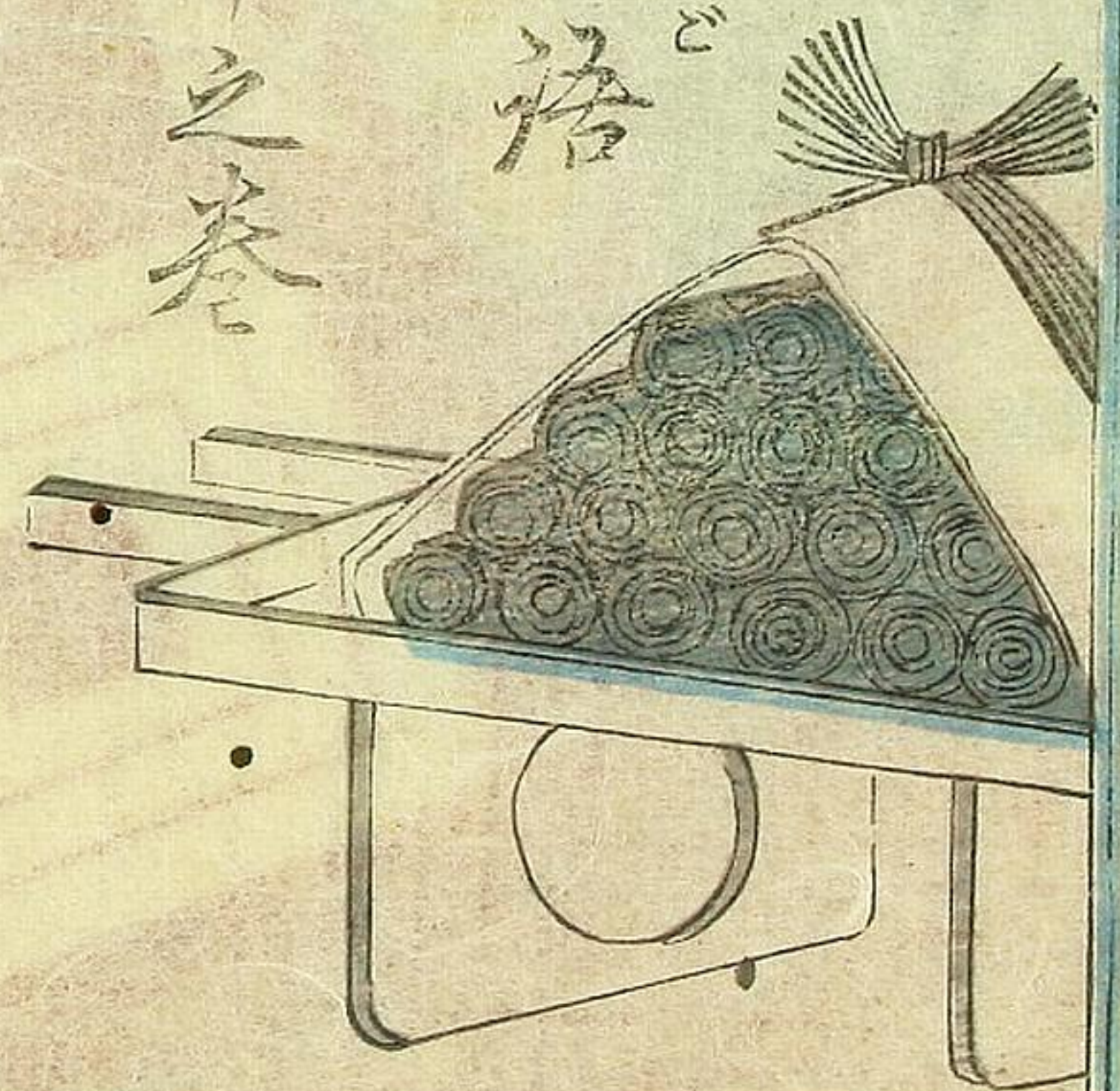
江に島新語

氣編

中之卷

久保田彦化綴

揚州周延画



延壽堂様

上の巻うつく
 上の心の鬼も衆龍と七條
 終りて三希を流のうみ
 多勢ふせまはしと光の
 史と衆助入此目順と
 通下るふも身結介の
 黄金やまらうけたる此
 おきとるもだほあつ
 ひとあひさつ縁髪ひつる人
 目順よまらるそのか引よ
 らんそ女房のあんとのり
 帰るらん縁あか初が父の
 まつりてまらん侍も人母さ
 良

▲悪いさうねとぶら
 おさんい堪忍てやうや
 志んせと子供あつらも
 生の母あつら何年あつら
 うみぞと希を流のうみ
 心切ふとと直るとんを流
 おんてあつらあつらと
 衆助入ととととととと
 思ひつら思ひつら
 思ひつら思ひつら
 思ひつら思ひつら
 思ひつら思ひつら

▲縁髪むんざとととと
 引さう力の月日よ十條
 まきあがりととと風情
 生あつらあつら地獄の
 縁髪もあつらととと
 りととととととととと
 まつりやうまかひさ
 衆入あつらととと
 衆の流衣よととと
 りよもあつらととと
 早に紙の宛名
 あつらとととととと
 良



おまの改名す
めたはらとまも又はと暮して運ぶ

おまの
おまの改名す
めたはらとまも又はと暮して運ぶ
おまの改名す
めたはらとまも又はと暮して運ぶ
おまの改名す
めたはらとまも又はと暮して運ぶ



おまの改名す
めたはらとまも又はと暮して運ぶ
おまの改名す
めたはらとまも又はと暮して運ぶ
おまの改名す
めたはらとまも又はと暮して運ぶ



つき 投つてはな
先程

三の丸御方

ひて丹次側の
ふみえり
と実々

●おひきめと
程中へおせり
が七郎の宿の宿
氷り野のま

その
まき
轉びて
ひそそ
ひそそ
らるる
あつり
井之側
一彼店丁



△さうさうさうさうさうさう
さりと晴ささるら、由井の巡り
まの車の舟やうらちのしほの

秘藏天演風



の奴の方小糸
痛みえと

△突つてはな
朱と珠と文とささるら
りそへ同絶さ
ねど今のお書り
乳をー遠ひさるら



三の九殿

つき松一のなごころ
 関分て頼みおどろき
 ちして下し目と後
 るがうみ

▲横ごころたれ
 ▲物とをいひたせむ夜
 目かぬそれと
 知れぬとも
 泣かぬなる格も

又及たをみて
 な色灯いと
 挑灯のりりびみ
 うるむらひら
 小ねひふ腰
 一と帯を
 へ向ふ深ッく
 片身たより服
 腋へ深なを履ひ
 るうらひ魚しめ細
 ひの髪とをうせ
 風情あり長登の
 都はまが衣負と
 りうくとや抱し



子
 ちとせつたつちや
 史とあつた
 ぶいふの長谷の元
 愛あつた今くと一
 美ゆくと後と一
 修家の交際

ゆめりうへ
 密生
 ありと張りの
 せとめには
 とかひよも通ぐ
 ある白井方より
 する恵との金と
 つ
 ちりく小佐
 飛よとも
 多ひ泣
 の涙の
 かひさ
 あたつと
 こまの
 柳うとら
 つまがる
 の報を
 飛めさ
 金く
 か久
 ぐ

つき紙よりと取りしと云

また去実虚と

打交へ迄

懐の考よ

お徳は

二日月

お徳は

医者
と云ふ
病の
危の



三の丸殿の飼猫

●金と云ふはつて

口と云ふはつて

丁の御家と

おひと小頼

遠あつて

かひと小密

お徳のりか

うのりも同

家ののみ顔

りとかれ

お徳と云

が祀せ

△病者
と云ふ
病の
危の
△



お大濱風

△病者
と云ふ
病の
危の
△

お徳と云

るや明白

お徳と云

らと云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

お徳と云

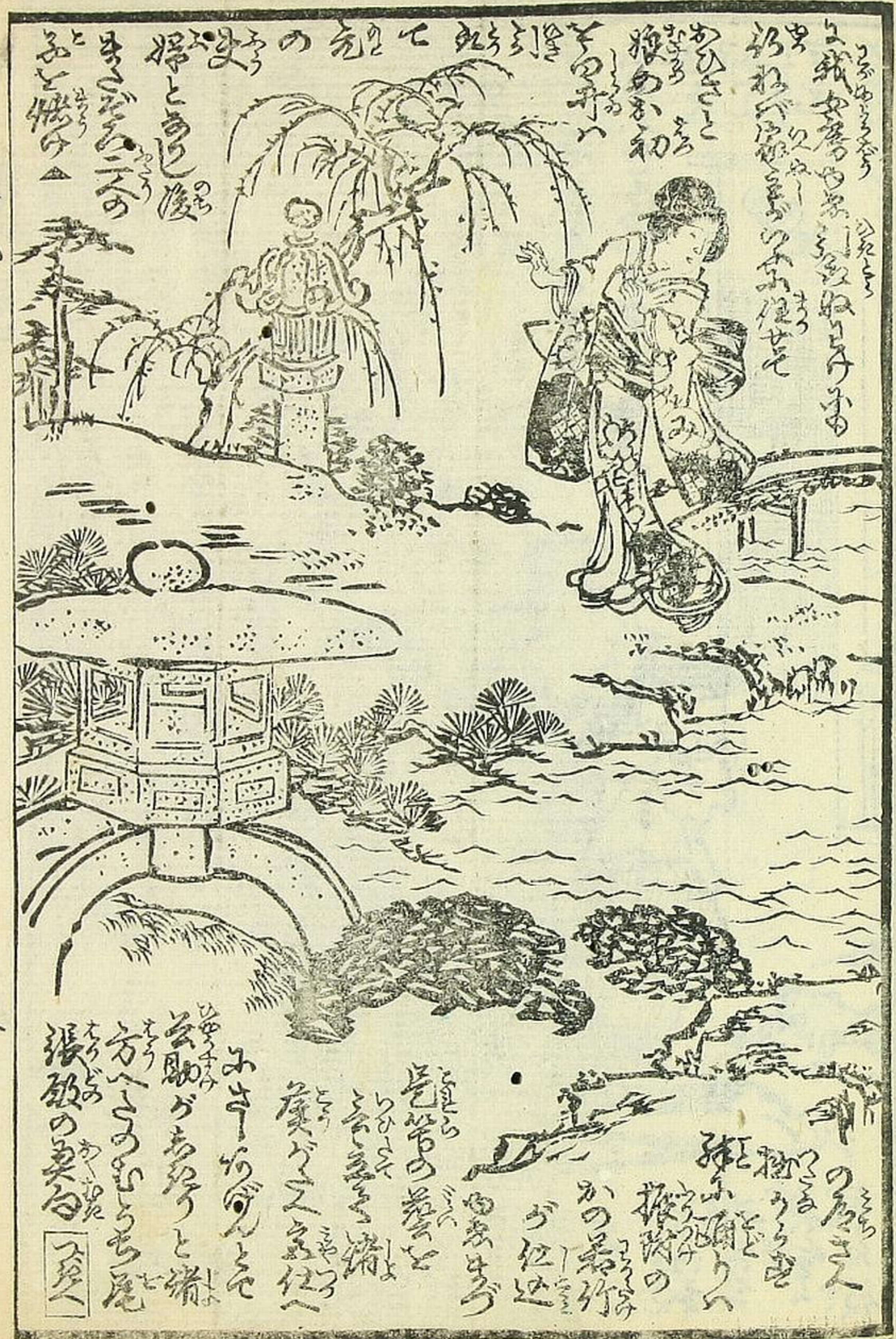
お徳と云



ついでに
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

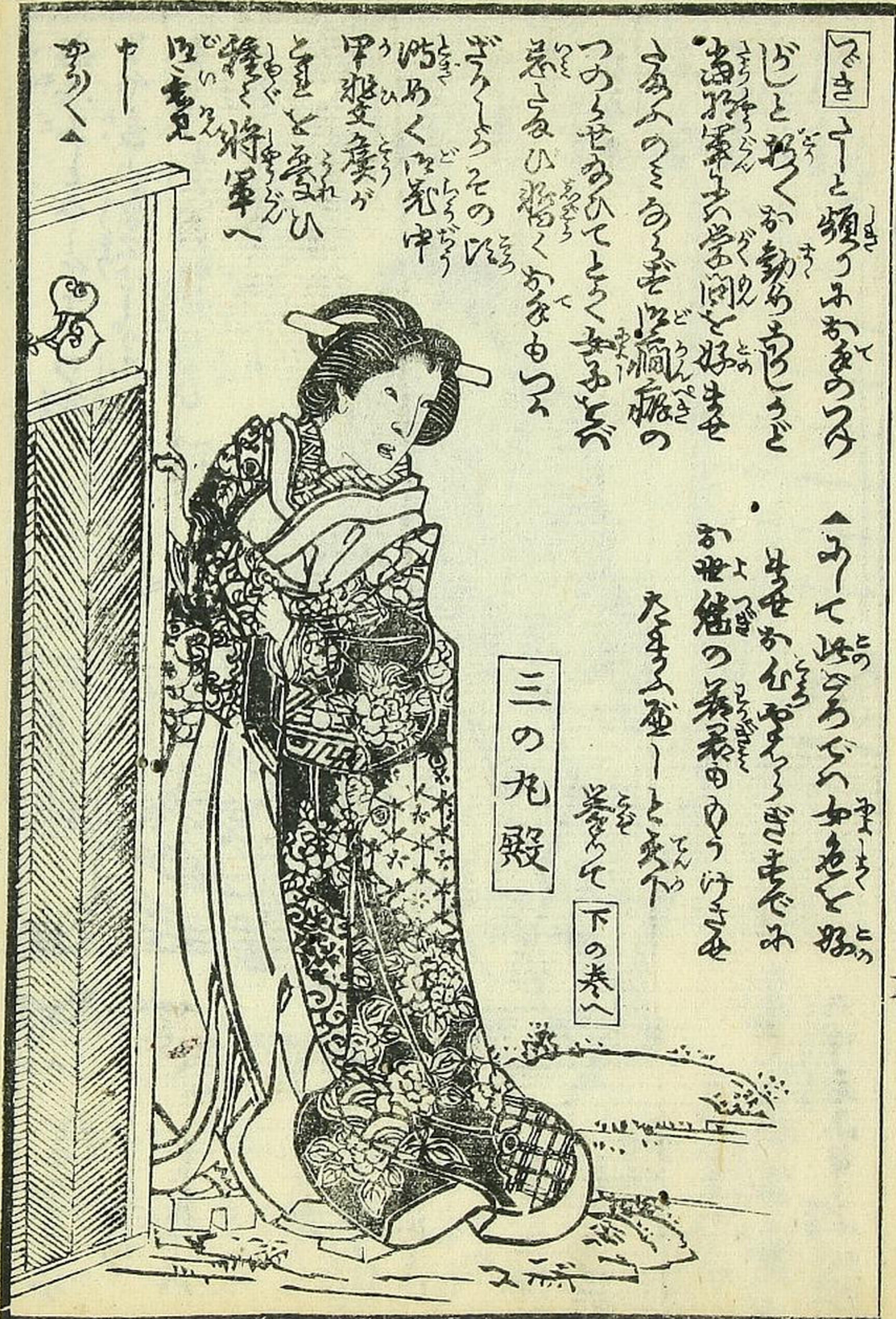
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの



あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの



つぎと頼みあはれつゝ
じと頼みあはれつゝ
當り軍の學問と好まむ
ゝあふのゝあふまは病癒の
つゝあひてとくまふま
茶もあひ頼みあはれつゝ
ざんしうそのは
つゝあひてとくまふ
甲斐交彦が
とまむとまひ
將軍へ
いさ見
中
ありく

ふみてははらへり女をたね
生をあはれつゝまふまを
お世徳の養育のりうけを
たまふま—とあふ
養ひて 下の巻へ

三の九殿

小倉山 昔日新話 五泉齋亭是正作
青樹榮 櫻齋房種画

算法教授書 全

鼠袂甲子真聞 三泉齋亭是正作
櫻齋房種画

人民必携交際義務 同

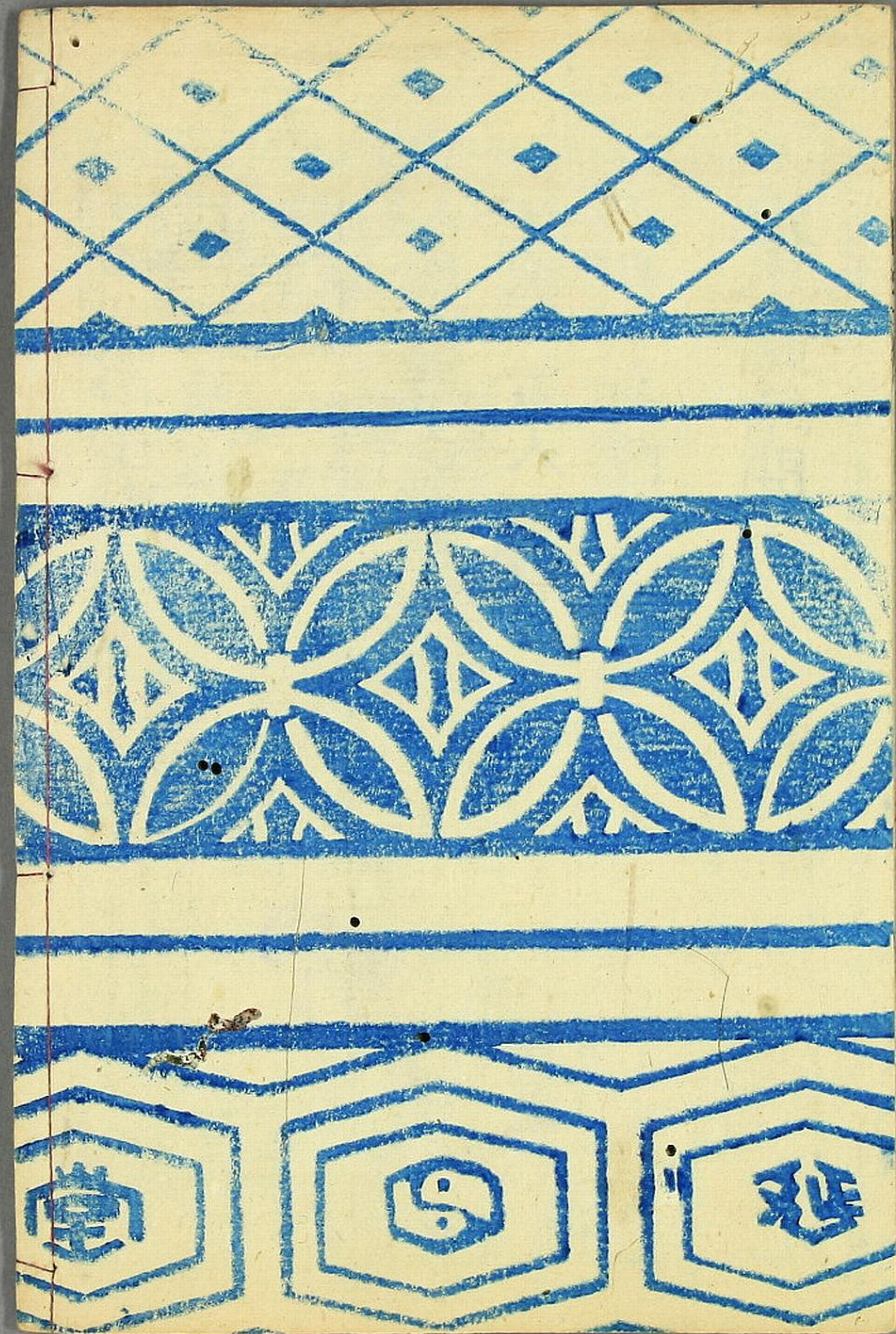
延壽 百人一首 全

大日本海陸全圖 銅版 全

地本錦繪問屋 東京日本橋通三丁目三番地
延壽堂 小林九屋次郎版元

白縫物譚 豊豆國

故人種貞稿種彦作
系叔菊壽堂主人爲今
目之新聞社あつて後編と
お叔をふあつてを依て
月氏へ乞て抄本より一層
をへつた抄本を看家方
陸陵以来とて依て弄ふ
六十四編出板 板元級白





10

15

20

25

30

ふみ満るるに

江の急新語

久保田

新屋ん

急と化

下の巻

楊洲ちの延画

はん



48-8207

中の巻のついで

おまへがひらぬ

ひらぬよかたをうたふ

新屋ん

急と化

久保田

新屋ん

下の巻

楊洲ちの延画

はん

△新屋ん

急と化

久保田

新屋ん

下の巻

楊洲ちの延画

はん

An illustration on the left page of the manuscript. At the top, a willow tree with long, drooping branches hangs over a pond. Two ducks are swimming in the water, their heads and necks visible above the surface. The pond is surrounded by reeds and other plants. The illustration is done in black ink on a light background.

△新屋ん

急と化

久保田

新屋ん

下の巻

楊洲ちの延画

はん

△新屋ん

急と化

久保田

新屋ん

下の巻

楊洲ちの延画

はん

ついでに...
おかしな事...
おひまり
○は...
...
...



死
の
後
狼
の
初
七
歳

おかしな事...
おひまり
○は...
...
...



おかしな事...
おひまり
○は...
...
...

おかしな事...
おひまり
○は...
...
...



あつち
 愛とあふ
 愛する人の
 世帯の
 屋敷
 屋敷
 屋敷
 屋敷

二年
 二年
 二年
 二年
 二年

この世帯の
 世帯の
 世帯の
 世帯の
 世帯の



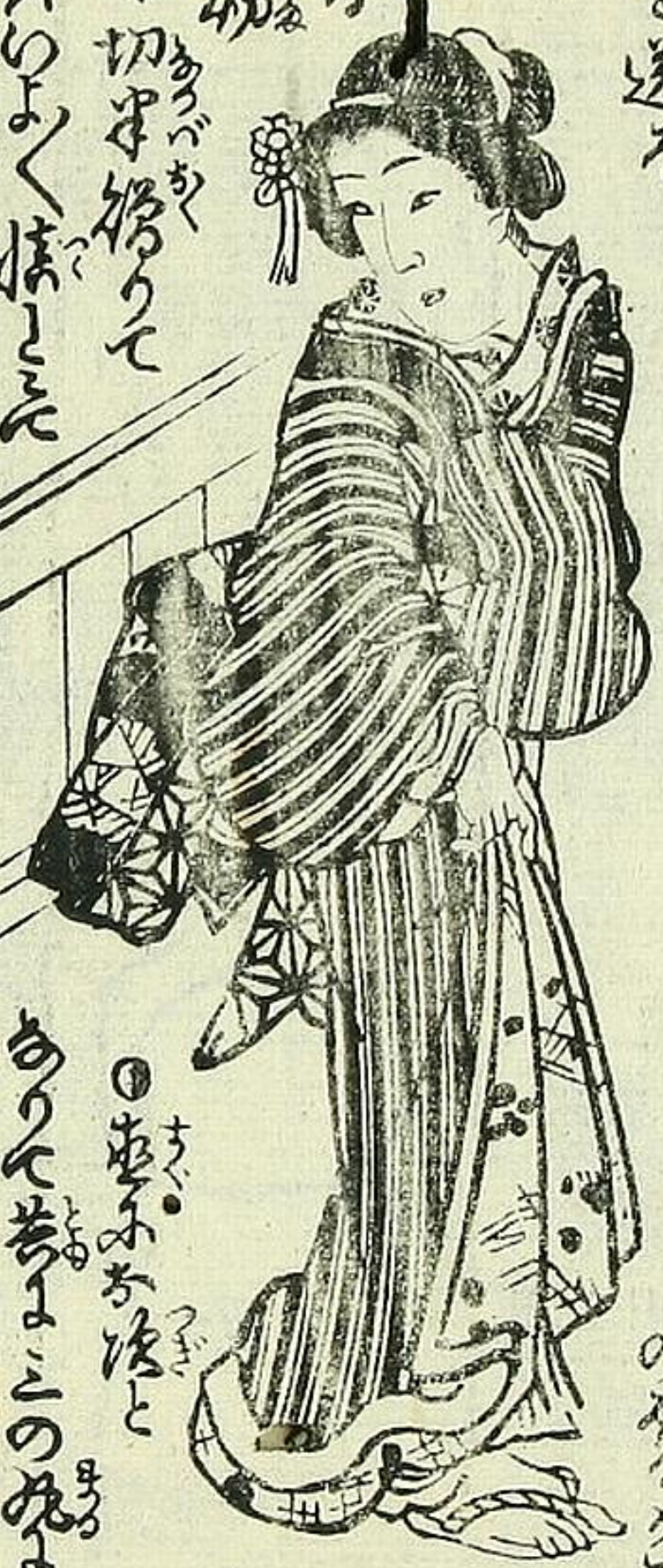
一人
 一人
 一人
 一人
 一人

あつち
 愛とあふ
 愛する人の
 世帯の
 屋敷
 屋敷
 屋敷
 屋敷

二年
 二年
 二年
 二年
 二年

つぎ 母のおひさの夜病よまらうや年の
 その内は病よこの世をたらさくきりては
 兄ある年お悲しが家督とあり父が御目と
 柄をりしげをまといりて由小祿を遣ふ
 その目を送る

その目を送る
 のこめ
 むま
 長母の
 兄がへ
 たるもの切平柄りて
 こそ化のりよく情とて
 おひさ夜と殺まふと父
 母のごとく册帯おの候と
 登一はきり大切と



●おまおはと
 ありて若よこのぬは後り
 登一が表おがまらうが身の
 お世の緒は
 たま一りり
 小付ての
 入りの
 かまらる

△まんとこのしひな夜おの終よ
 將軍のいさがつたはは腰脇の糸と
 ありしうはさぬとあれは
 居たらうとまら感持まらなく



おめしお家のゆく
 か着者の評判
 よくはあま
 と者女方
 おも用ひ
 まらう
 まらう
 まらうのお次の

お軍家おの性末
 とお
 めととあ
 られ地
 更にお捧ひま
 徒は女色は健
 糸と寄まの
 女の黒髪お大
 糸も様まらまを
 りたらうまら



源氏物語

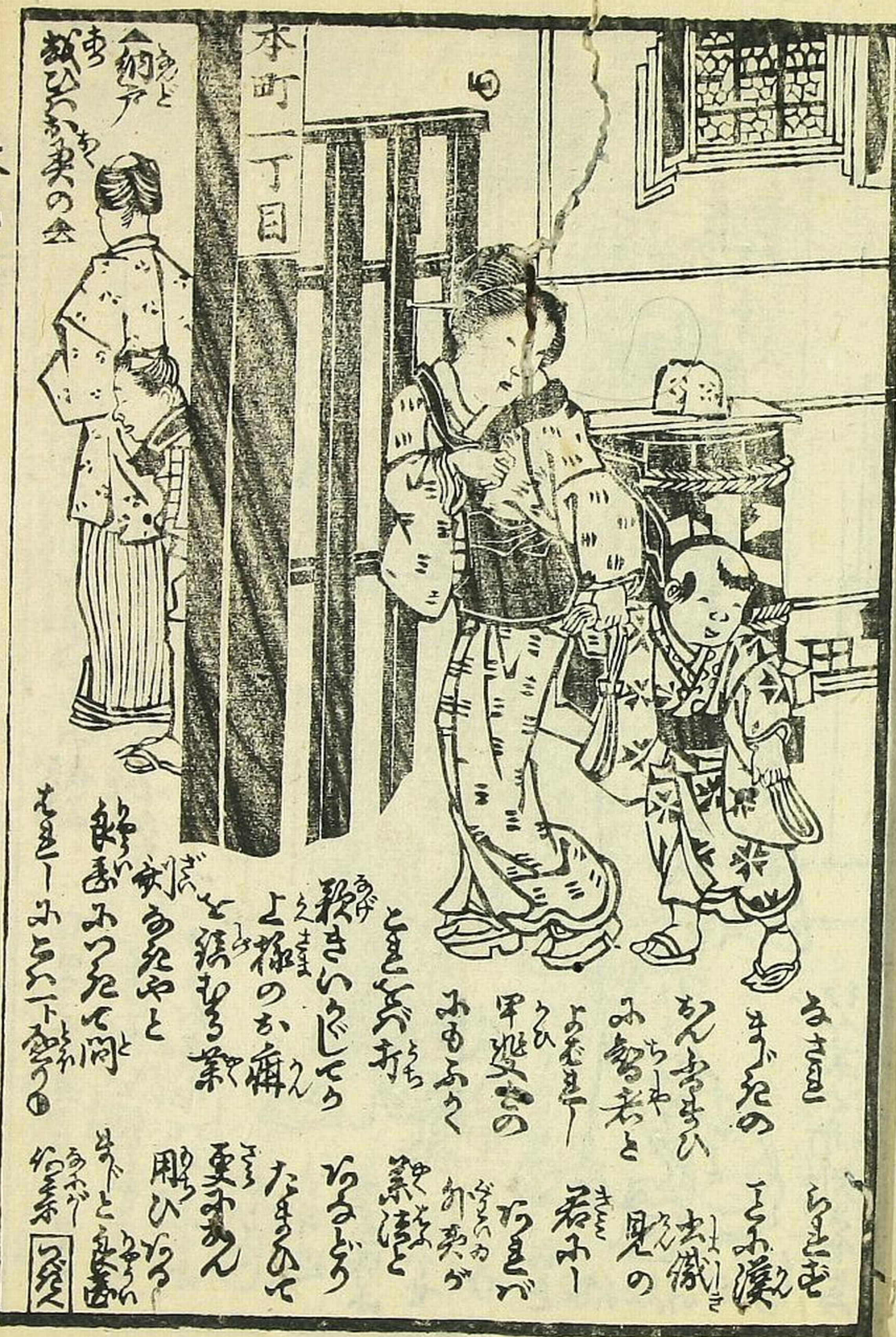
五二



つき 罪科しせらるるを
 奇怪の政事あつくと
 万民のよとを恨むひんま
 船儀まるのあまは中
 下も徳政人あひひん
 こと入生理と解た
 りとある人あまは
 痛なるつたか
 僕ふささし
 とけいなきいあく
 もおしゆ此後より
 ままか痛のさ
 ままべか仰あるお小姓おふ

のひき
 ねど
 法の秘
 密の
 徳神
 徳とりの
 方判
 おまを
 津薬
 の果とら
 く収ませ

△女中まぞとあいの
 おもひりたまひは御刀ふ
 ことうひて既ふを付す

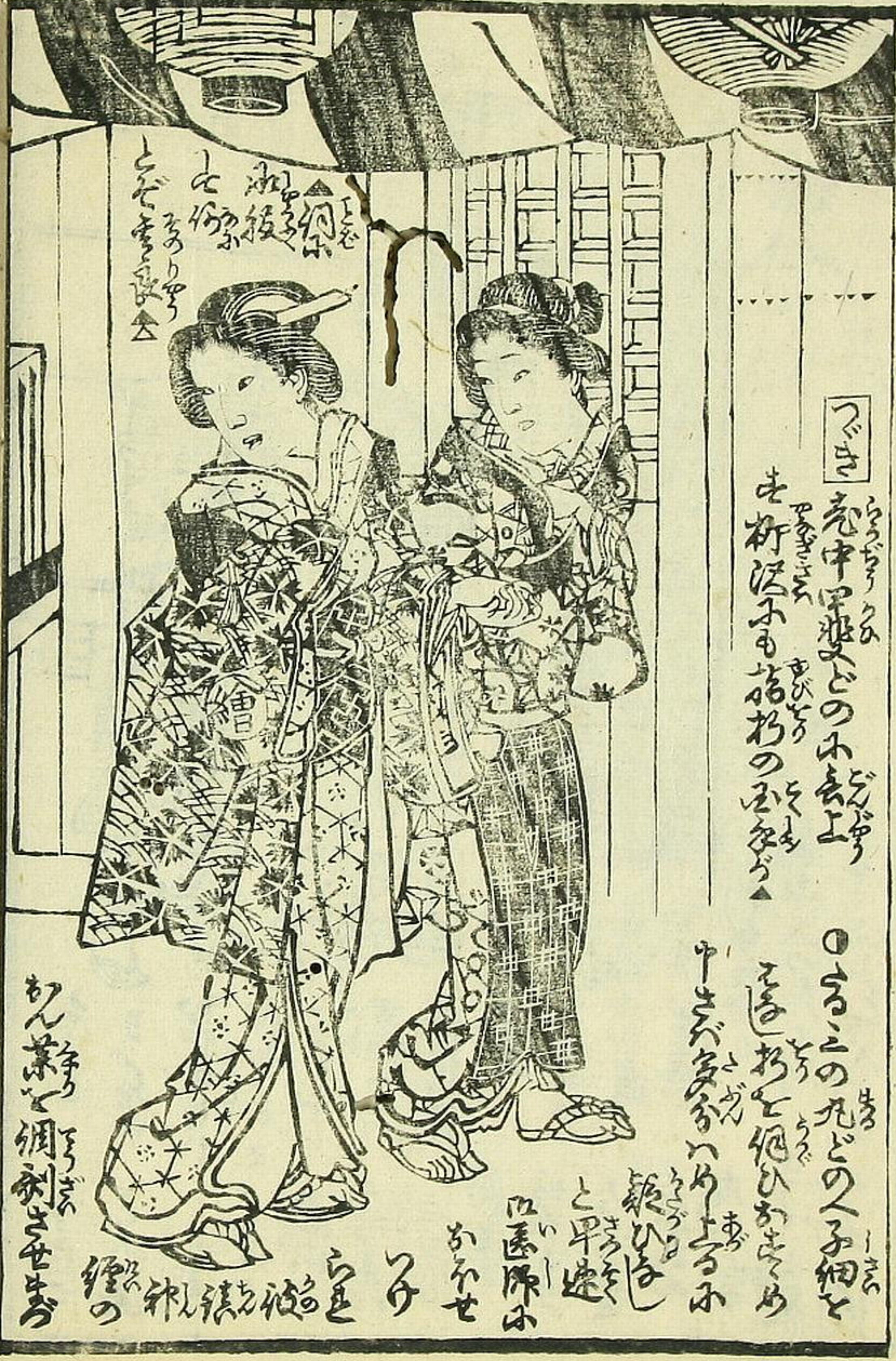


△納戸
 殿いあまの

本町一丁目

まの
 まの
 めん
 み
 甲
 お
 と
 殺
 上
 と
 解
 さ

ら
 小
 儀
 見
 君
 ち
 外
 薬
 り
 た
 更
 用
 解
 解

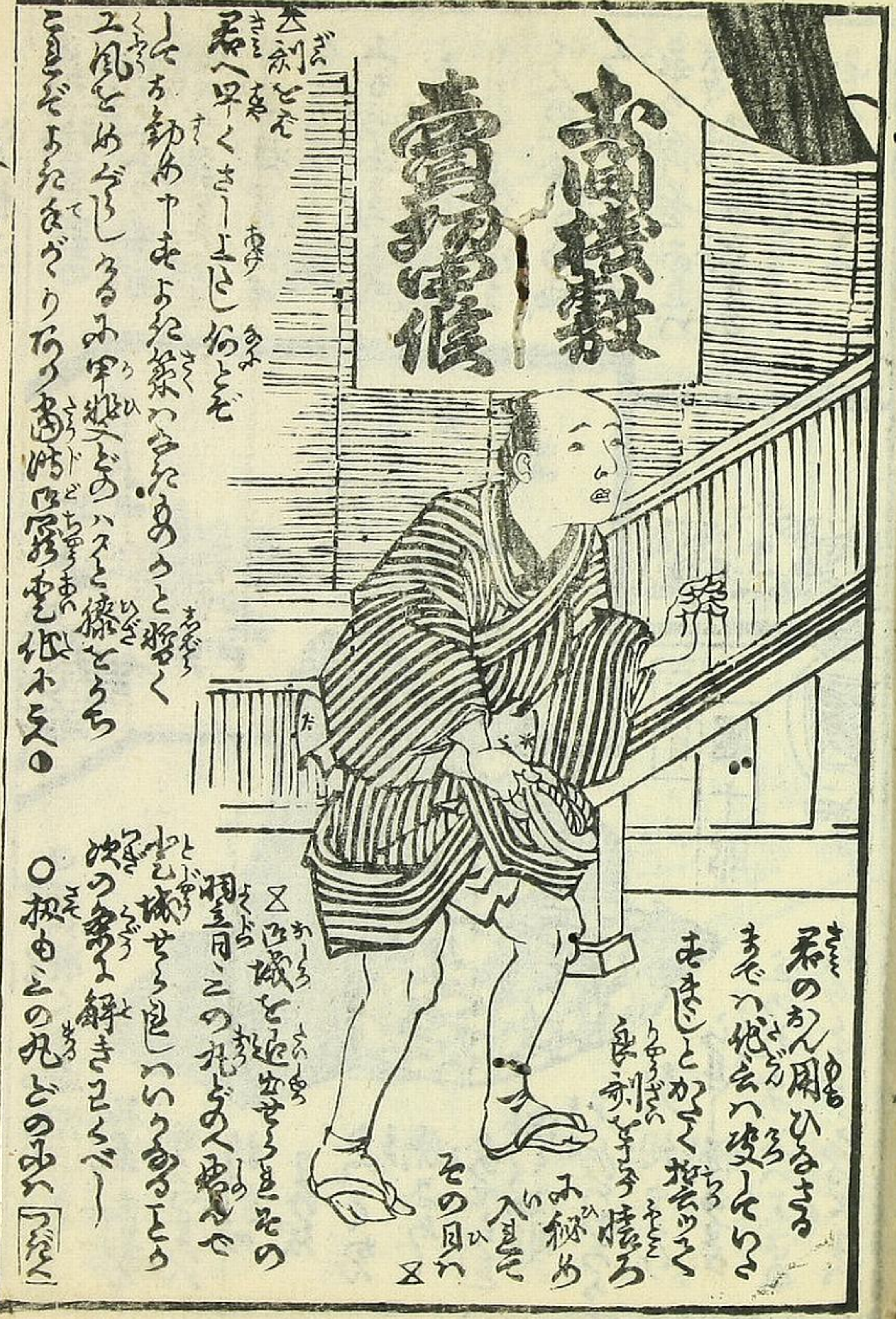


ついで
 老中甲斐守との小島上
 せ折返ふも祐おの玉をう

○さるこの丸どの入子細と
 こそおを袖ひかきめ
 中さばまふりりよるふ
 頼ひは
 と甲斐
 西原小
 おんせ

おの
 とぞき
 せ
 せ

おん葉と細刺をせ
 子
 後
 後
 後
 後



賞物中儀

大判と
 君へ早くさーよじゆとを
 一をち勤めやまよた葉のさためつと増く
 工風をめぐりしる小甲斐守のハスと藤とらち
 ことごとたなぐりちつあつははるをいれ小え

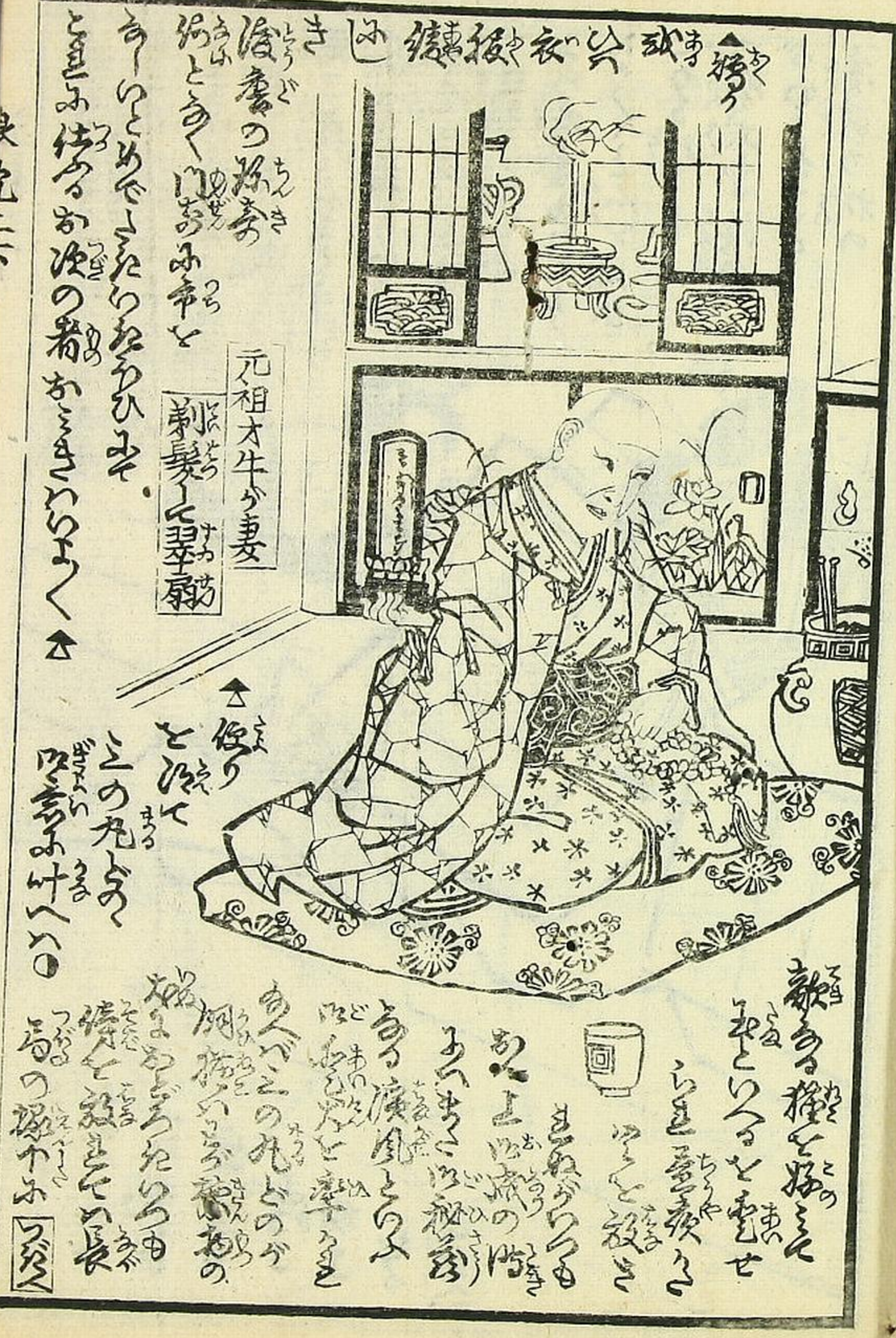
君の丸用ひるまる
 まるの代金へ変しそら
 ままじとかくておつて
 良刺さすきほろ
 み秘め
 入る
 その目
 相三日この丸どの入る
 小島城をいれいりつる
 次つあつ解きこらる
 ○おのこの丸どの入り

つぎ 源軍家の
 頼朝と云く威勢
 旭日の昇るが如く
 さも輝く光のつ
 らせあひ上極
 小もつふようとの
 との丸とのがは
 めとあんなり
 て人の一念と由助
 るるも中しくふ
 源の御堂あまは
 大なる小も教ま
 りとて同
 是處のあま



二代目
 團十郎

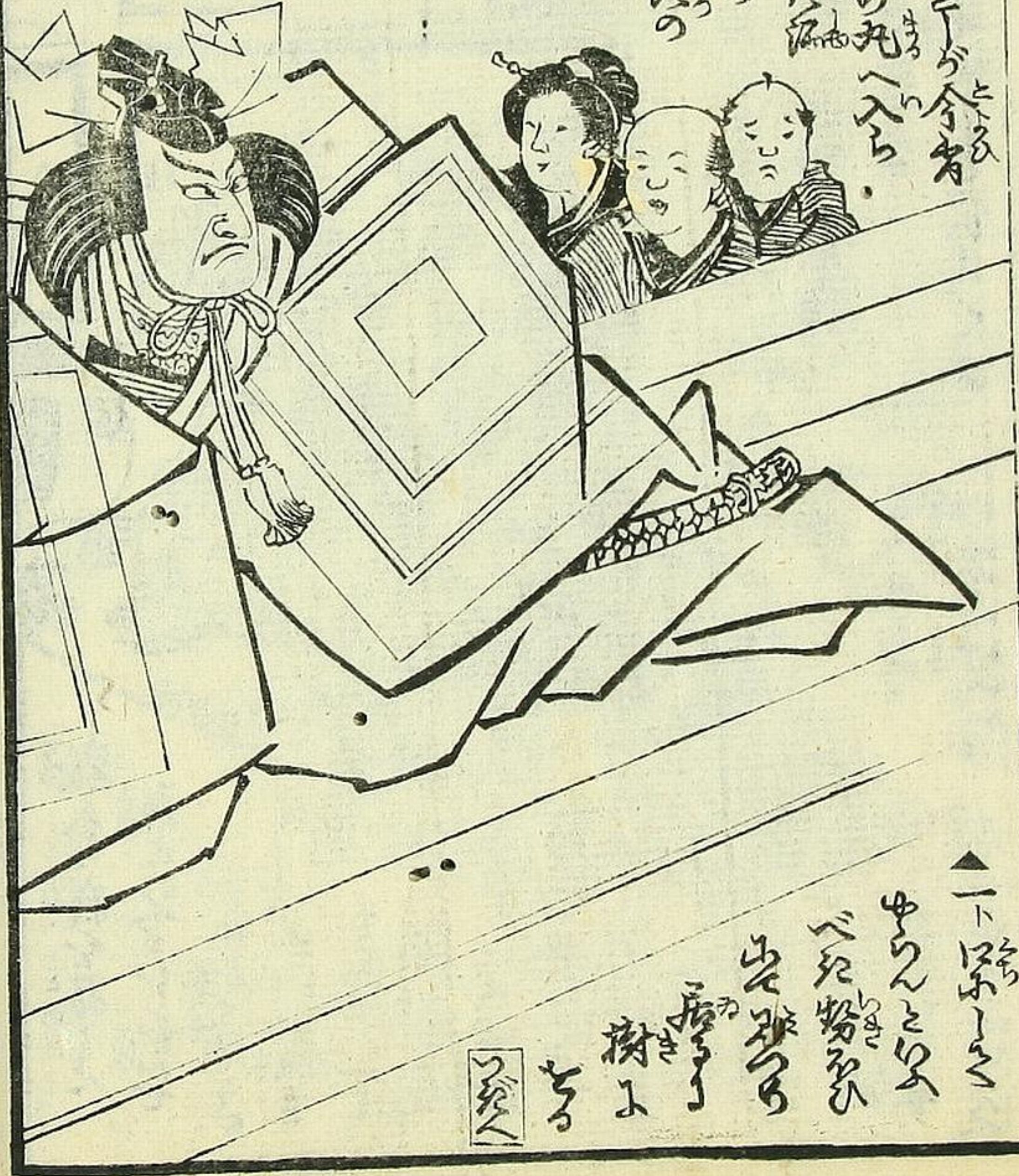
源軍家の
 源朝光の
 特別の
 名は
 りつと
 側ふり
 考せらる
 内と
 とは
 らぬゆけ
 らぬゆけ
 この丸とあまは
 らぬゆけ



元祖大牛が妻
 剃髪して翠扇

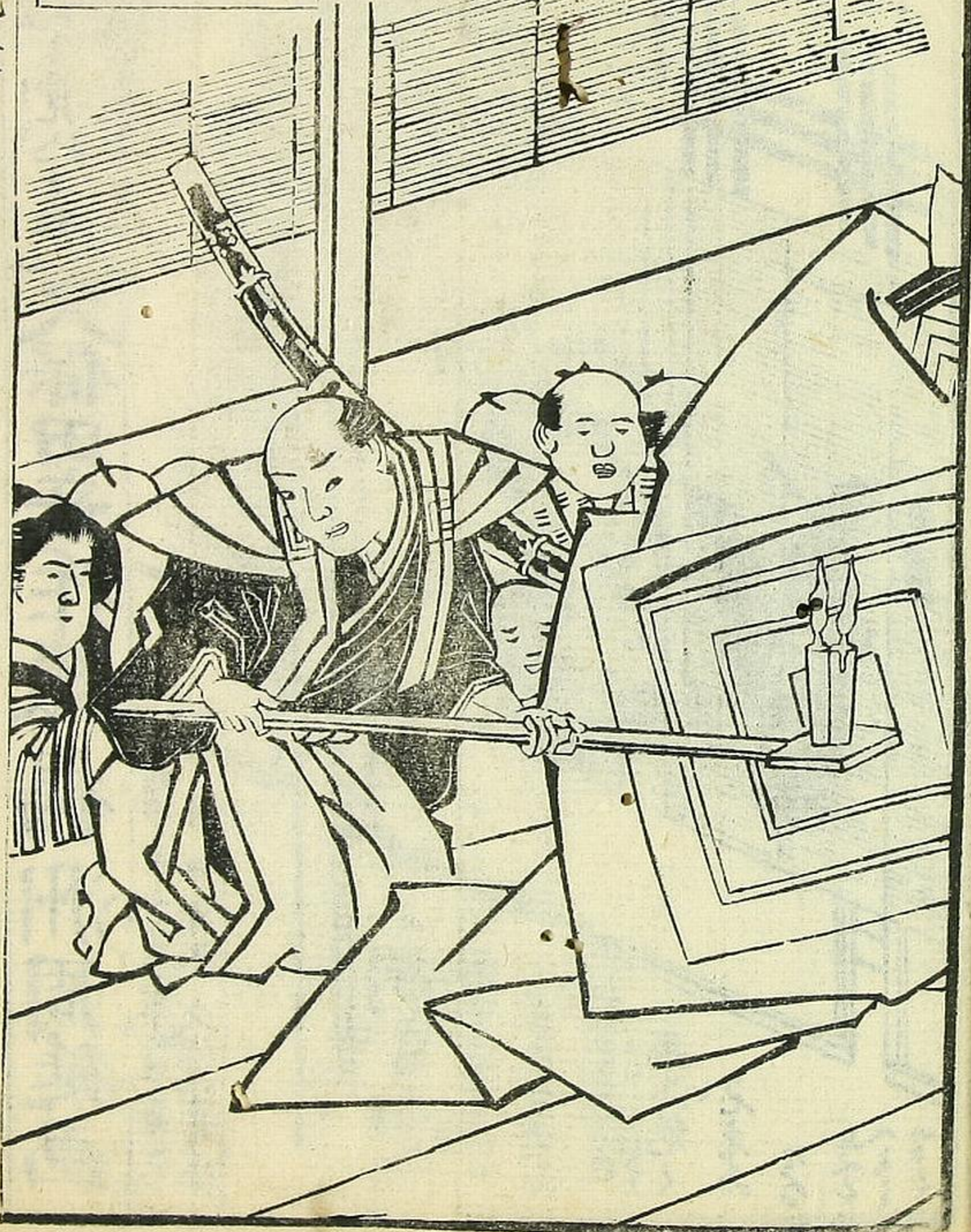
源軍家の
 源朝光の
 特別の
 名は
 りつと
 側ふり
 考せらる
 内と
 とは
 らぬゆけ
 らぬゆけ
 この丸とあまは
 らぬゆけ

ふき 多くまゝの濃樹が今者
由上梅屋成りてこの丸へ入ら
せしは口を閉ぢておぼろ
宜と下まゝの口を閉ぢて
偽し身下のあく目録の
麻へき葉りの
浪風のつられた由
以辺習お附の面
うの爲なるあれたる
らうくとんを用ひ
てわろおしゆ
はせだる浪風
がいらあるところ
産あつ松の



二下 緊し
中しと
べた勢
出せり
樹よ
つた

濃樹よ
のり
一匹
の権
とねい
樹より
をりま
飛そりて
團十郎
暫ふ出
扮の圖



010190516798

瀬村三郎

つぎ 務も犬も見込まれ
今の必作宛まうくと
いふこと

久保田彦作綴 揚洲周延画

御明治三年 芝居屋町四丁目
届 月 日 編輯 久保田彦作



ねど
あ
ぬの
中
ま
互ひふ
見合ひ
しご
ころ
より

揚洲の方へ
近知事を大い
まうとせ
あ
お
お
お

三三三
ハ
ハ
ハ

艶娘 毒蛇洲 三編

柳水亭種清作
揚洲周延画

あまのこ

浪枕江の島新語 三編

久保田彦作編輯
揚洲周延画

あまのこ
あまのこ
あまのこ
あまのこ

事情 明治太平記

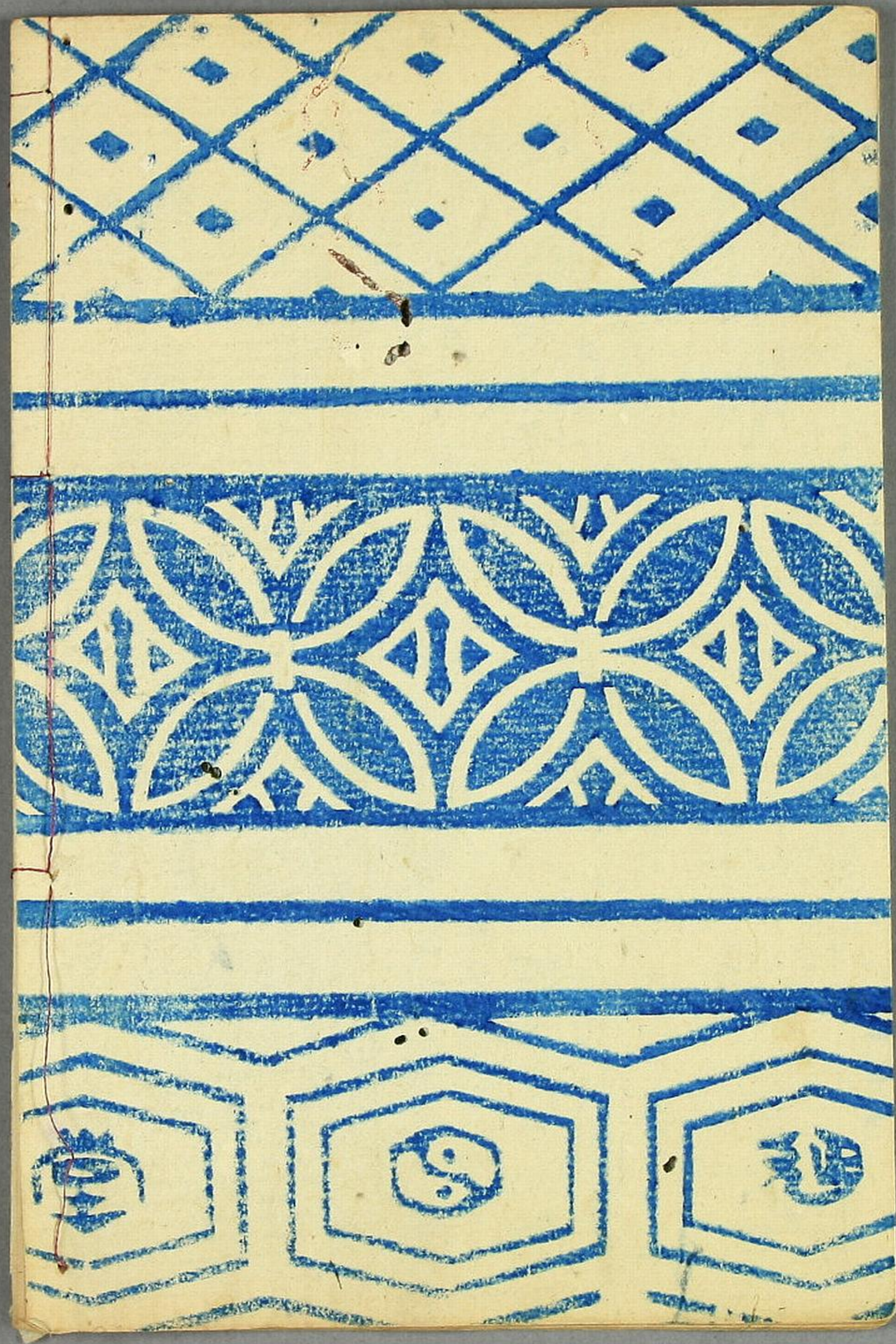
村井静馬著
鮮齋永濯画

伏見より 熊本 萩 至る十五編
十六編より 鹿兒島 一 至る

○初編ハ伏見戦争と始り
御一新以来の事情明細に記し居る
人情開化一見する
平が各付繪入りて婦女子も解し
野東 叡山 焼討 其外

書肆 問屋

東京日本橋通二丁目十三番地
延壽堂 丸 小林鉄次郎版元



古蹟探

生自探る

遠流記

新奇倣

歌舞妓

新報

浪枕江廻嶋新語

貳編

久保田彦作編輯
楊洲周延画

達

壽

